

## エレミヤ書3-5章 「頑なな民」

### 1A 帰って来るイスラエル 3-4:5

1B 軽く見るユダ 6-10

2B 恵み深い主 11-18

3B 哀願の声 19-25

4B 真実な悔い改め 1-4

### 2A 襲いかかる破滅 4:5-31

1B 神の裁き 5-18

1C 偽りの平和の預言 5-10

2C 神への反逆 11-18

2B 破滅への嘆き悲しみ 19-31

1C 終わりの予兆 19-28

2C 踏みにじられた女 29-31

### 3A 頑なな心 5

1B 真実を求めない町 1-11

1C 一人もない義人 1-5

2C 甚だしい背信 6-11

2B 自分の咎による災い 12-31

1C 偽りの預言 12-18

2C 偽りの心 19-31

## 本文

### 1A 帰って来るイスラエル 3-4:5

エレミヤ書3章を開いてください。私たちは前回、3章5節まで読みましたが、6節から新たなエレミヤの説教になります。「ヨシヤ王の時代に、主は私に仰せられた。」という言葉から始まりますね。けれども、話は続いています。ユダの国がなぜ、偶像礼拝に陥って、そしてバビロンによって裁かれることによっていくのか？一言でいうならば、「初めの愛から離れてしまった」ということです。荒野を旅していた時に、主が共におられた時のことを、主は「婚約時代の愛(2:2)」と言われました。それを約束の地に入って、豊かさの中で全ての源が主なる神にあるのに、主を尋ね求めずに、一つ一つの欲求を満たす神々に求めたというのが、彼らの最も大きな問題でした。それを主は、湧き水の泉、壊れた水溜りに喩えて、主ご自身が湧き水の泉なのに、それを捨てて、壊れた水溜りである神々に拠り頼んだことを語っておられます。そして主は、ご自身を夫に喩えて続けて語られます。

### 1B 軽く見るユダ 6-10

3:6 ヨシヤ王の時代に、主は私に仰せられた。「あなたは、背信の女イスラエルが行なったことを

見たか。彼女はすべての高い山の上、すべての茂った木の下に行って、そこで淫行を行なった。7 わたしは、彼女がすべてこれらのことをしたあとで、わたしに帰って来るだろうと思ったのに、帰らなかった。また裏切る女、妹のユダもこれを見た。8 背信の女イスラエルは、姦通したというその理由で、わたしが離婚状を渡してこれを追い出したのに、裏切る女、妹のユダは恐れもせず、自分も行って、淫行を行なったのをわたしは見た。9 彼女は、自分の淫行を軽く見て、国を汚し、石や木と姦通した。10 このようなことをしながら、裏切る女、妹のユダは、心を尽くしてわたしに帰らず、ただ偽っていたにすぎなかった。・・主の御告げ。・・」

午前礼拝で話しましたように、背信の女とは北イスラエルのことです。初代の王ヤロブアムが、金の子牛による礼拝を始めたので、ずっと偶像礼拝を行なっていました。主はそして、「離婚状を渡してこれを追い出した」と言われていますが、これはアッシリヤ捕囚の事です。主がエジプトの奴隷状態から救われて、ご自分の妻に迎えるようにイスラエルを自由にし、ご自分のものとしたのですが、約束の地から引き抜くことによって、離婚状を出したような状態にされました。モーセの律法の中に、離婚状についての掟が次のようにあります。「人が妻をめとって、夫となったとき、妻に何か恥すべき事を発見したため、気に入らなくなった場合は、夫は離婚状を書いてその女の手に渡し、彼女を家から去らせなければならない。(申命 24:1)」

そこで残された南ユダは何をしたかと言いますと、彼らも偶像礼拝に陥りました。しかし、彼らと北イスラエルとの違いは、神殿礼拝を守りながらなおのこと、偶像を拝んだということです。ですから、ここでユダは「裏切りの女」と呼ばれています。夫と結ばれていながら、他の男とも関係を持っている裏切りです。そして、「ただ偽っていた」とあります。「主に仕えています」と言いながら、それは表面的な礼拝であり、日常生活では他の神々に仕えていたのです。人によく見せる偽りを持っているし、自分は主に仕えているという自分自身をも偽っています。そして、「あなたは、なぜこんな酷いことをするのですか。」と、神は不誠実だといって、神をも偽り者としていきます。

## 2B 恵み深い主 11-18

3:11 主はまた、私に仰せられた。「背信の女イスラエルは、裏切る女ユダよりも正しかった。3:12 行って、次のことばを北のほうに呼ばわって言え。背信の女イスラエル。帰れ。・・主の御告げ。・・わたしはあなたがたをしからない。わたしは恵み深いから。・・主の御告げ。・・わたしは、いつまでも怒ってはいない。3:13 ただ、あなたは自分の咎を知れ。あなたは自分の神、主にそむいて、すべての茂った木の下で、他国の男とかってなまねをし、わたしの声を聞き入れなかった。・・主の御告げ。・・」

表向きは、圧倒的にイスラエルのほうが悪いことをしています。ユダは頑張って、主に対する礼拝を守っていて、より正しいように見えます。しかし、主の評価はその逆です。背信の女イスラエルのほうが正しい、と主は言われるのです。それはなぜでしょうか？午前礼拝で話しましたね、彼らのほうが、自分の罪深さを素直に認め、神の恵み深さを信じて、神に近づくからです。「帰れ」とい

う言葉が大事ですね、神が怒って自分から離れたのではなく、自分が神から離れたのです。多く  
の人は、「神が自分に怒っている」と思っているのですが、実は自分が心を神に閉ざして、神を勝  
手に恐れて、窮屈にして、信頼しないで近づいていないだけです。しかし、帰ることができるのは、  
主の憐れみにすがろうと決めたからです。ちょうど、父の憐れみにすがるとともに家に戻った、放蕩  
息子と同じように、戻ります。

3:14 背信の子らよ。帰れ。…主の御告げ。…わたしが、あなたがたの夫になるからだ。わたしは  
あなたがたを、町からひとり、氏族からふたり選り取り、シオンに連れて行こう。3:15 また、あなた  
がたに、わたしの心になつた牧者たちを与える。彼らは知識と分別をもってあなたがたを育てよ  
う。

主からの祝福は、何か自分が良いことを積んでから与えられるものではありません。全くの罪深い  
者、しかし自分のしたことを悔いて、主の前に砕かれている時に、あたかも自分が最も正しいこと  
をしたかのように、受けるに値しない祝福を受けている状態であります。彼らが約束の地に戻っ  
てきた後で、その町の代表、氏族の代表が選ばれてシオンに連れて来られ、そして牧者たち、つまり  
指導者たちが与えられます。シオンにおけるまことの礼拝による霊的な知識と分別による、支配を  
受けることができるということです。礼拝によって、自分の生活に神の霊的な支配が与えられると  
いうことは、本当に私たちに平安と幸いを与えてくれます。

3:16 その日、あなたがたが国中にふえて多くなるとき、…主の御告げ。…彼らはもう、主の契約  
の箱について何も言わず、心にも留めず、思い出しもせず、調べもせず、再び作ろうともしない。  
3:17 そのとき、エルサレムは『主の御座』と呼ばれ、万国の民はこの御座、主の名のあるエルサ  
レムに集められ、二度と彼らは悪いかたくなな心のままに歩むことはない。3:18 その日、ユダの  
家はイスラエルの家といっしょになり、彼らはともどもに、北の国から、わたしが彼らの先祖に継が  
せた国に帰って来る。」

「その日」という言葉がありますが、これは主の定められた究極の日、終わりの日のことです。で  
すから、過去の歴史ではなく、これからのこと、主が再臨されて神の国が立てられる時のことです。  
その時は、かつての神殿時代のように、契約の箱は至聖所に置かれていません。そこには、王の  
王、主の主であられるイエスご自身が王座に着き、栄光に輝いておられるからです。そしてイスラ  
エルにとって、「主の契約の箱」は苦い思い出があります。ペリシテ人と戦った時に、イスラエルは、  
シロにあった神の幕屋から、契約の箱を戦場に持ってきてペリシテ人に対峙しました。神社のお守  
りのように、その箱に力があると信じたからです。けれども大敗しました。箱そのものに力があるの  
ではなく、主がそこにいる、と言われるその約束とご臨在に力があるということです。だから、これ  
がないということは、彼らが偶像礼拝に頼るのをやめた、捨てたということを意味しています。

そして、回復した北イスラエルに連なるようにして、ユダの家も帰ってきます。初めの者が後にな

り、後の者が初めになると言われたイエス様の言葉の通りです。こうやって、ソロモンの死後以降、分裂していたイスラエルが再び一つになれる、癒しも経験できます。

### 3B 哀願の声 19-25

3:19 「わたしはどのようにして、あなたを息子たちの中に入れ、あなたに、慕わしい地、諸国のうちで最も美しいゆずりの地を授けようかと思っていた。また、わたしは、あなたがわたしを父と呼び、わたしに従って、もう離れまい、と思っていた。3:20 ところが、なんと、妻が夫を裏切るように、あなたがたはわたしを裏切った。イスラエルの家よ。…主の御告げ。…

主がこのように、イスラエルに対して呼びかけ、そしてイスラエルが自分の背信を悲しみ、泣いている言葉が次に出てきます。つまり、自分がキリストにあっけなく愛され、慈しみを受け、祝福も与えられているのに、愚かにもそこから出ていって自分の頑張りで生きていたり、自分の欲で貪っている自分がいることを、呼びかけておられます。

3:21 一つの声が裸の丘の上で聞こえる。イスラエルの子らの哀願の泣き声だ。彼らは自分たちの道を曲げ、自分たちの神、主を忘れたからだ。3:22 背信の子らよ。帰れ。わたしがあなたがたの背信をいやそう。」「今、私たちはあなたのもとにまいります。あなたこそ、私たちの神、主だからです。3:23 確かに、もろもろの丘も、山の騒ぎも、偽りでした。確かに、私たちの神、主に、イスラエルの救いがあります。3:24 しかし、私たちの若いころから、バアルが、私たちの先祖の勤労の実、彼らの羊の群れ、牛の群れ、息子、娘たちを食い尽くしました。3:25 私たちは恥の中に伏し、侮辱が私たちのおおいとなっています。私たちの神、主に対し、私たちも先祖たちも、私たちの若いころから今日まで罪を犯して、私たちの神、主の御声に聞き従わなかったからです。」

すばらしい悔恨です。一つは、山において騒いでいたことは偽りだと言っています。バアルなどの偶像に対して行なっていた騒ぎは、偽りだったということに気づいています。自分にとって騒ぎは何でしょうか？主にある平安ではない、思い煩い、人々がしていることで自分もしなければいけないと圧迫を受けて、やっていること。そうしたことに対する悔恨です。もう一つは、バアルによって自分たちの財産が食い尽くされたということです。偶像礼拝によって、自分の尊い財産が失われてしまったということです。自分の願っていたものによって、あらゆるものがそこに消費されてしまった状態です。そして、最後に、「私たちの若いころから今日まで罪を犯して」と言っています。長いこと行ってきた習慣について、その生き方についてそれを悔い改めることは、並大抵のことではありません。しかし、自分のこれまでのあり方がボタンの掛け違いだったということを認めることは、初めて自分という圧政者から解放されることができます。

### 4B 真実な悔い改め 1-4

4:1 「イスラエルよ。もし帰るのなら、…主の御告げ。…わたしのところに帰って来い。もし、あなたが忌むべき物をわたしの前から除くなら、あなたは迷うことはない。4:2 あなたが真実と公義と正

義とによって『主は生きておられる。』と誓うなら、国々は主によって互いに祝福し合い、主によって誇り合う。」

主のところに帰ってきた民が、主の御名を呼び求め、その正義と公正、真実の中に生きている姿です。そしてその彼らによって、他の国々も主を知ることができ祝福を受けます。

4:3 まことに主は、ユダの人とエルサレムとに、こう仰せられる。「耕地を開拓せよ。いばらの中に種を蒔くな。4:4 ユダの人とエルサレムの住民よ。主のために割礼を受け、心の包皮を取り除け。さもないと、あなたがたの悪い行ないのため、わたしの憤りが火のように出て燃え上がり、消す者もないだろう。」

実は、ユダのほうがもっと大きな問題があったのです。同じように、主のところに帰れという言葉投げかけても、確かに、「はい、帰りたいと思います。」という回答は帰ってきます。ある意味、信仰的には模範生です。しかし、心には「いばら」があります。思い煩いがあります。一方では、主に従うと言いながら、もう一方では違うことを考えているという二心があります。それでもって、自分自身は主に聞き従っているという自負があります。だから、そのように思い煩いがあるということさえ、自分自身で見えていません。そして、「心の包皮」を取り除けと言われていました。イスラエルの男子はみな割礼を受けましたが、パウロは、律法の規定を守ってはじめて割礼に意味があるのであって、外側だけの肉の割礼だけであるなら、無割礼と変わらないとローマ2章で論じています。つまり、外側をきれいにしようとする動き、心は墮落しており、直しようがなく、神に敵対しているのに、それでも頑張りできれいにしようとしていく姿勢のことを指しています。

## **2A 襲いかかる破滅 4:5-31**

そして4章5節から6章の終わりまで、主がユダとエルサレムに迫りくる裁きを宣言されます。(今日は6章まで読まず、5章で止めるとします。)

### **1B 神の裁き 5-18**

#### **1C 偽りの平和の預言 5-10**

4:5 「ユダに告げ、エルサレムに聞かせて言え。国中に角笛を吹け。大声で叫んで言え。『集まれ。城壁のある町に行こう。』4:6 シオンのほうに旗を掲げよ。のがれよ。立ち止まるな。わたしがわざわざいを北からもたらし、大いなる破滅をもたらすから。4:7 獅子はその茂みから上って来、国々を滅ぼす者は彼らの国から進み出た。あなたの国を荒れ果てさせるために。あなたの町々は滅び、住む者もいなくなろう。」4:8 そのために荒布をまとい、悲しみ嘆け。主の燃える怒りが、私たちが去らないからだ。

バビロンがエルサレムの町に襲ってくる預言です。エルサレム以外のユダの町々に住む人々に、城壁のあるエルサレムの中に行きなさいという呼びかけをしておられます。そして、そこで荒布を

まとして悲しみ嘆けと言っています。それは、悔い改めの嘆きではなく、むしろ悔い改めていないので、それで主の怒りが去らず、その破壊に対して悲しんでいる姿です。罪を悲しんでいるのではなく、その悲惨な姿に悲しんでいるだけです。

4:9 「その日には、主の御告げ。王の心、つかさたちの心は、ついえ去り、祭司はおののき、預言者は驚く。」4:10 そこで、私は言った。「ああ、神、主よ。まことに、あなたはこの民とエルサレムを全く欺かれました。『あなたがたには平和が来る。』と仰せられて。それなのに、剣が私のものに触れています。」

ここから主なる神は、王、祭司、預言者に対峙されます。なぜなら、主は破壊を意図しておられるのに、彼らは「平和が来る」と語っていたからです。バビロンから解放されなければいけないのだ、という独立を王は打ち立て、預言者はそれを後押しする預言を行ないました。「間もなく、バビロンから主は解放してください。」と言っていました。そして祭司は、誤った安心感に人々を導き、それが主の臨在であると偽っていたのです。罪によっては嘆きと悲しみを伴わなければいけないのに、安心してることが神の臨在であり、罪の中にあっても安心してることが大事と教えていました。エレミヤは、こうした預言者や祭司、王たちに取り囲まれて、まるで主ご自身がそれを語っているかのような錯覚を覚えていたのです。「聖書にはそんなこと、書かれていないのに。しかし、あまりにも多くの牧師、伝道師、専門家がそのことを語っている。」という悩みを打ち明けているのです。

### 2C 神への反逆 11-18

4:11 その時、この民とエルサレムにこう告げられる。荒野にある裸の丘の熱風が、わたしの民の娘のほうに吹いて来る。吹き分けるためでもなく、清めるためでもない。4:12 これよりも、もっと激しい風が、わたしのために吹いて来る。今、わたしは彼らにさばきを下そう。

イスラエルの南部、ネゲブ沙漠においては風が吹いたら、涼しいのではなく、熱風が吹くので、耐えられない暑さになります。このような熱風のことで、エルサレムが清められるというふうなものではなく、それが徹底的に破壊されるという、神の裁きが来ます。改良する、改善させるということではなく、そこに死をもたらず裁きです。

4:13 見よ。それは雲のように上って来る。その戦車はつむじ風のように、その馬は驚よりも速い。ああ。私たちは荒らされる。4:14 エルサレムよ。救われるために、心を洗って悪を除け。いつまで、あなたの中には邪念が宿っているのか。4:15 ああ、ダンから告げる声がある。エフライムの山からわざわざを告げ知らせている。

破壊が来る時は、速やかに来ることを予告しています。その切迫性は、すでにイスラエルの北端の町ダンに、バビロンが攻めてきたという声が聞こえます。たちまち、エルサレムのすぐ北にあるエフライムの山々からも災いの知らせが来ます。津波のような流れの速さです。

4:16 国々に知らせよ。さあ、エルサレムに告げ知らせよ。包囲する者たちが遠くの地から来て、ユダの町々に叫び声をあげる。4:17 彼らは畑の番人のように、ユダを取り囲む。それは、ユダがわたしに逆らったからだ。・・主の御告げ。・・4:18 あなたの行ないと、あなたのわざが、あなたの身にこれを招いたのだ。これがあなたへのわざわいで、実に苦い。もう、あなたの心臓にまで達している。

速やかにエルサレムをバビロン軍が包囲している姿です。そして大事なものは、このことです。「あなたの行ないと、あなたのわざが、あなたの身にこれを招いたのだ。」ということ。ユダの人々は、バビロンに攻められ、包囲されるということと、自分たちの罪や悪が関連付けられていませんでした。主がモーセを通して、それから預言者から預言者へと、ずっと長い期間に御言葉によって語られているのに、その通りのことが起こっているのに、御言葉を見つめていなかったのも、単に災いが近づいているとしか考えていませんでした。私たち人間は何か悪いことが起こると、「なぜ、こんなことを主は許されるのか。」と思いますが、主が何かを教えておられて、その多くが私たちを聖めるためであることを教えておられます。この方のみが主であり、救い主であることを教えておられるのですが、それにいつまでも気づかないという問題があります。

## 2B 破滅への嘆き悲しみ 19-31

### 1C 終わりの予兆 19-28

4:19 私のはらわた、私のはらわた。私は痛み苦しむ。私の心臓の壁よ。私の心は高鳴り、私はもう、黙っていられない。私のたましいよ。おまえが角笛の音と、戦いの雄たけびを聞くからだ。4:20 破滅に次ぐ破滅が知らされる。全国が荒らされるからだ。たちまち、私の天幕も荒らされ、私の幕屋も倒される。4:21 いつまで私は、旗を見、角笛の音を聞かなければならないのだ。

エレミヤが、神からの預言、その幻を、体を持って受け取っている姿です。自分の体に衝撃が走っています。一昨日、ある集会で、熊本の被災地から牧師さんが上京され、その被災の体験を話してくださいました。今回の地震で恐ろしいのは、地震の規模以上に、余震の多さです。いや、初めの地震は前揺れであり、本震はその後でした。その本震の後に、家の中で寝られなくなって、ガレージのところにビニールシートを敷き、布団を家から動かして寝たそうですが、眠れませんでした。体を横にして寝たので、地面から恐ろしい音を聞いたそうです。地中深くで、絶え間なく振動している音であります。それはまるで、地獄の雄たけびのような音だったそうで、言葉に表現できないと仰っていました。

私たちは、この地はそのまま残っている、今の平穏な生活もこのままずっと続くのだと思っていたのですが、実はそうではないことを聖書は教えています。「1テサロニケ 5:3 人々が「平和だ。安全だ。」と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。」

4:22 実に、わたしの民は愚か者で、わたしを知らない。彼らは、ばかな子らで、彼らは悟りが無い。彼らは悪事を働くのに賢くて、善を行なうことを知らない。

エレミヤが語った後に、主ご自身が語っておられます。彼らは愚かで、ご自身を知らない。馬鹿な子らで、悟りが無いと言われていますが、ユダの民はその反対を考えていたことでしょう。エレミヤの言葉こそが、愚かで悟りが無い、あなたはユダが置かれた状況を何も分かっていないと言っていたことでしょう。ここに世の知恵と神の知恵の違いがあります。世においては、神の知恵は愚かに見えるのです。しかし、神の愚かさは世の知恵よりも賢いとコリント第一 1 章にあります。

4:23 私が地を見ると、見よ、形もなく、何もなく、天を見ても、そこには光もない。4:24 山々を見ると、見よ、揺れ動き、すべての丘は震えていた。4:25 私が見ると、見よ、人間はひとりもいない。空の鳥もみな飛び去った。4:26 私が見ると、見よ、果樹園は荒野となり、町々は主によって、主の燃える怒りによって、取りこわされていた。4:27 まことに主はこう仰せられる。「全地は荒れ果てる。しかし、わたしはことごとくは滅ぼさない。4:28 このために、地は嘆き悲しみ、上の天も暗くなる。わたしが語り、わたしが企てたからだ。わたしは悔いず、取りやめもしない。」

エレミヤに対して主は、バビロンによるエルサレムの破壊のみならず、終わりの日の破壊を示しておられます。天が真っ暗となり、山々が揺れ動き、土地は荒地となります。

### 2C 踏みにじられた女 29-31

4:29 騎兵と射手の叫びに、町中の人々が逃げ去った。彼らは草むらにはいり、岩によじのぼった。すべての町が捨てられ、そこに住む人もない。4:30 踏みにじられた女よ。あなたが緋の衣をまとい、金の飾りで身を飾りたてても、それが何の役に立とう。目を塗って大きく見せても、美しく見せても、かいたくない。恋人たちは、あなたをうとみ、あなたのいのちを取ろうとしている。4:31 まことに、わたしは、産みの苦しみをする女のような声、初子を産む女のようなうめき、シオンの娘の声を聞いた。彼女はあえぎ、手を伸べて言う。「ああ。私は殺す者たちのために疲れ果てた。」

再び主は、エルサレムを一人の若い女として描いておられます。なぜ娘のように描かれるのか？それは、私たちが何かに依存しているということを示すからです。自分自身を、着ている物や金の飾り、また化粧によって目を引き立たせるのは、内側だけでは自分は引き立たないという不安があるからです。それと霊的な事はつながっています。つまり、自分を良く見せようとする動きです。自分の中に、神の愛がない。神の愛がないので、恐れがある。恐れがあるので、保障を外に求めます。

しかし、その恐れはかえってその恐れているものを引き寄せるだけです。ヨハネ第一 4 章には、「恐れには刑罰が伴っている(18 節)」と書いてあります。ここでもエルサレムは、バビロンに確かに殺されていって、その中であえいでいる姿が表れています。



### 3A 頑なな心 5

そし5章では、なぜそのように主が裁かれるのか、彼らの心の状態をさらに詳しく話されます。

#### 1B 真実を求めない町 1-11

#### 1C 一人もいない義人 1-5

5:1 エルサレムのちまたを歩き巡り、さあ、見て知るがよい。その広場で捜して、だれか公義を行ない、真実を求める者を見つけたら、わたしはエルサレムを赦そう。5:2 たとい彼らが、「主は生きておられる。」と言っても、実は、彼らは偽って誓っているのだ。

公義を行なう者たちが、一人もいなかったという事実がありました。主は赦したいと願われています。怒るに遅い方で、情け深い方です。たとえ一人でも真実な者がいたら、町全体をお赦しになる方です。覚えていますか、アブラハムがロトのことを思いながら、ソドムとゴモラの町のことで執り成しをしました。五十人の正しい者がいても、町全体を赦すと主は言われました。十人の正しい者でも、そうすると主は約束されました。けれども、一人もいなかったなのでその町を滅ぼされました。

5:3 主よ。あなたの目は、真実に向けられていないのでしょうか。あなたが彼らを打たれたのに、彼らは痛みもせずでした。彼らを絶ち滅ぼそうとされたのに、彼らは懲らしめを受けようとしませんでした。彼らは顔を岩よりも堅くし、悔い改めようとしませんでした。5:4 そこで、私は思いました。「彼らは、実に卑しい愚か者だ。主の道も、神のさばきも知りもしない。5:5 だから、身分の高い者たちのところへ行って、彼らと語ろう。彼らなら、主の道も、神のさばきも知っているから。」ところが、彼らもみな、くびきを碎き、なわめを断ち切っていました。

エレミヤの心の葛藤を言い表しています。預言を行なっているのですが、彼らが一向に悔い改める気配がないのです。これだけはっきりしているのに、それでも悟ることがありません。身分の高い人であれば、教育もあるし、多くの情報がそこに集まってきます。だから分かってくれると思ったところが、そうでなかったと嘆いています。

#### 2C 甚だしい背信 6-11

5:6 それゆえ、森の獅子が彼らを殺し、荒れた地の狼が彼らを荒らす。ひょうが彼らの町々をうかがう。町から出る者をみな、引き裂こう。彼らが多くの罪を犯し、その背信がはなはだしかったからだ。5:7 これでは、どうして、わたしがあなたを赦せよう。あなたの子らはわたしを捨て、神でないものによって誓っていた。わたしが彼らを満ち足らせたときも、彼らは姦通をし、遊女の家で身を傷つけた。5:8 彼らは、肥え太ってさかりのついた馬のように、おのおの隣の妻を慕っていなく。5:9 これらに対して、わたしが罰しないだろうか。..主の御告げ。..このような国に、わたしが復讐しないだろうか。

ユダの罪は、何か苦境の中で罪を犯してしまったというものではありません。むしろ、主の恵みと

祝福が豊かに与えられているのに、その満ち足りていた時に罪を犯していたのです。主にあって、何の問題も霊的にないのに、それでもその豊かさからかえって不満や不足を訴えるのが、私たちの肉です。

5:10 ぶどう畑の石垣に上って滅ぼせ。しかし、ことごとく滅ぼしてはならない。そのつるを除け。それらは主のものではないからだ。5:11 イスラエルの家とユダの家とは、大いにわたしを裏切ったからだ。…主の御告げ。…

このような激しい神の怒り、破壊の中にも、主の真実がここに書かれています。「しかし、ことごとく滅ぼしてはならない。」とあります。5章18節にも繰り返されています。それはなぜか？彼らは契約の民だからです。主が彼らを選ばれたからです。ゆえに、この破壊はむしろ新しい創造、再創造のための破壊であり、永遠の破壊ではないということでもあります。

## 2B 自分の咎による災い 12-31

### 1C 偽りの預言 12-18

5:12 彼らは主を否んでこう言った。「主が何だ。わざわざは私たちに襲わない。剣もききんも、私たちは、見はしない。5:13 預言者たちは風になり、みことばは彼らのうちでない。彼らはこのようになる。」5:14 それゆえ、万軍の神、主は、こう仰せられる。「あなたがたが、このようなことを言ったので、見よ、わたしは、あなたの口にあるわたしのことばを火とし、この民をたきぎとする。火は彼らを焼き尽くす。5:15 イスラエルの家よ。見よ。わたしはあなたがたを攻めに、遠くの地から一つの国民を連れて来る。…主の御告げ。…それは古くからある国、昔からある国、そのことばをあなたは知らず、何を話しているのか聞き取れない国。5:16 その矢筒は開いた墓のようだ。彼らはみなつわもの。5:17 彼らはあなたの刈り入れたものとあなたのパンを食らい、あなたの息子、娘を食らい、あなたの羊の群れと牛の群れを食らい、あなたのぶどうと、いちじくを食らい、あなたの抛り頼む城壁のある町々を、剣で打ち破る。5:18 しかし、その日にも、…主の御告げ。…わたしはあなたがたを、ことごとくは滅ぼさない。」

主が裁かれると言っているのに、そうではない、災いは来ないと言っている預言者の声に対する神の言葉です。彼らの言葉を風のようにすると言われ、そしてさらに具体的にバビロンがエルサレムに何をするのかを教えています。「それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らなくて、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。(ローマ 2:4-5)」主が滅ぼすことはない、という前提で生きると、必ず自分自身で何とかできるという発想が浮かびます。このローマ2章は、他人を裁いている人、自分自身が正しいとある程度思っている人々に対して語っているものです。自分の力に頼ることが、いかに自分の心を頑なにし、悔い改めをさせなくさせてしまっているかお分かりになると思います。また、主がとても良くしてくださっているのに、それに対する感謝をなくなってしまうかも

お分かりになったと思います。

### 2C 偽りの心 19-31

5:19 「あなたがたが、『何のために、私たちの神、主は、これらすべての事を私たちにしたのか。』と尋ねるときは、あなたは彼らにこう言え。『あなたがたが、わたしを捨て、あなたがたの国内で、外国の神々に仕えたように、あなたがたの国ではない地で、他国人に仕えるようになる。』

偶像に仕えていて、自由を保っていることはできません。必ず奴隷状態になります。神以外のものに仕えるなら、その奴隷となります。

5:20 ヤコブの家にこう告げ、ユダに言い聞かせよ。5:21 さあ、これを聞け。愚かで思慮のない民よ。彼らは、目があっても見えず、耳があっても聞こえない。5:22 あなたがたは、わたしを恐れないのか。…主の御告げ。…それとも、わたしの前でおののかないのか。わたしは砂を、海の境とした。越えられない永遠の境界として。波が逆巻いても勝てず、鳴りとどろいても越えられない。5:23 ところが、この民には、かたくなで、逆らう心があり、彼らは、そむいて去って行った。

主は、逆らう心にある不思議を、海の境を例えにして話しておられます。自然界は、主に従っています。私たちには日本地図がありますが、江戸時代に測量をした伊能忠敬の地図は非常に正確で、現在のものと大きな差はありません。数百年前も、今も、海岸線が変わっていない証拠です。波は激しく岸辺を打っているにも関わらず、変わることがないのです。しかしユダの民は反逆しました。ここに人間の心、自由意志を有する心のジレンマがあります。主はご自分の形に似せて人間を造り、それゆえ自由意志を与えられました。しかし、それを神に反逆する用に用いることができます。ここが愛の不思議です。愛は強制できません。愛をもって主の命令に従うのです。強いられて従うことは、神の願われる従順ではありません。したがって、神の愛を知ることこそが、最も大きな源なのです。

5:24 彼らは心の中でも、こう言わなかった。『さあ、私たちの神、主を恐れよう。主は大雨を、先の雨と後の雨を、季節にしたがって与え、刈り入れのために定められた数週を私たちのために守ってください。』と。5:25 あなたがたの咎が、これを追い払い、あなたがたの罪が、この良い物を拒んだのだ。

罪を犯している時は、私たちは近視眼的になっています。なぜ、今、良い物が与えられないのだと不平を言います。しかし、主は良くしてくださっているのです。恵みを与えておられるのです。それに感謝しないで、目の前にある不足を見て、不満を述べるのです。恵みに感謝しないこと、応答しないことが悪と言ってよいでしょう。

5:26 それは、わたしの民のうちに、悪者たちがいるからだ。彼らは、待ち伏せして鳥を取る者のよ

うに、わなをしかけて人々を捕える。5:27 鳥でいっぱい鳥かごのように、彼らの家は欺きでいっぱいだ。だから、彼らは偉い者となって富む。5:28 彼らは、肥えて、つややかになり、悪事に進み、さばきについては、みなしごのためにさばいて幸いを見させず、貧しい者たちの権利を弁護しない。5:29 これらに対して、わたしが罰しないだろうか。・・主の御告げ。・・このような国に、わたしが復讐しないだろうか。5:30 恐怖と、戦慄が、この国のうちにある。5:31 預言者は偽りの預言をし、祭司は自分かつてに治め、わたしの民はそれを愛している。その末には、あなたがたは、どうするつもりだ。」

これらの悪があるにも関わらず、それでも大丈夫だと祭司も、預言者も民に思わせています。なにがいけないのか？悪を悪としないこと、罪を罪としないことです。その後のことは考えていないのです。先ほど読んだローマ2章の続きには、同じことが書かれています。裁きは免れることはできないのだということです。「ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。(ローマ2:5)」主は必ず、それぞれの行ないに応じて報われる方です。

ではどうすればよいのか？根本の問題は、主の慈しみを軽んじているということです。主の恵み、主の愛を横においてやっつけてしまっている。このことを信じていないということです。主は愛しておられるのだ、どんなことをしても主は変わらずに愛しておられるのだ。これがなければ、人は変わりません。そして主に愛されているということを知った者が、今日読んだ、神の裁きを免れることができます。「1ヨハネ 4:17-19 このことによって、愛が私たちにおいても完全なものとなりました。それは私たちが、さばきの日にも大胆さを持つことができるためです。なぜなら、私たちもこの世にあってキリストと同じような者であるからです。愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。なぜなら恐れには刑罰が伴っているからです。恐れる者の愛は、全きものとなっていないのです。私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。」神は愛されています。このことを信じていくときに、初めて私たちは神を愛します。そして、さばきの日にも大胆さを持つことができるのです。